

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24401039

研究課題名(和文) フィリピン系移民第1.5世代による社会生活の構築に関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative study on construction of social lives by Filipino 1.5-generation immigrants

研究代表者

長坂 格 (Nagasaka, Itaru)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：60314449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,600,000円

研究成果の概要(和文)：子ども期にフィリピンから異なる移住先国(フランス、イタリア、日本、カナダ、アメリカ、オーストラリア)へと移住したフィリピン系第1.5世代を対象者として、彼らによる移住経験理解、そして社会関係と自己意識の再構築の過程を記述分析した。具体的には、彼らが移住以前と以後にどのような課題に直面してきたか、また新たな関係性やアイデンティティの構築を図りながら、それらの課題にどのように対処してきたかを民族誌的調査によって明らかにし、比較検討をおこなった。

研究成果の概要(英文)：Drawing on ethnographic research on 1.5-generation Filipinos who immigrated during their childhood years to different countries; France, Italy, Japan, Canada, the US, and Australia, this research project focused on their migratory experiences. More particularly, it unraveled different challenges and constraints they have faced in the Philippines as well as in respective countries, and delineated and compared how they responded to the challenges and constraints by (re)constructing their relatedness and identities.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 移民 第1.5世代 家族 フィリピン 社会関係 アイデンティティ 比較

1. 研究開始当初の背景

近年の経済水準の高い国々への家族移住の増大と移住先の多様化は、親の移住先へと移動する子どもたちの増大、そして彼らの移住経験の多様化を帰結する。しかし移住研究においては、一部の例外的研究を除き、これら移動する子ども達の移住経験に十分な注意が向けられてこなかった。こうした研究状況において、代表者らは、子ども期に親の移住先へと移住した人々を第 1.5 世代移住者と呼び、1970 年代以降、多数の国に移住者を送り出してきたフィリピンに焦点を当て、第 1.5 世代の適応過程に関する共同研究(基盤研究 B「移民第 1.5 世代の子ども達の適応過程に関する国際比較研究: フィリピン系の事例」)をおこなった(2009 年~2011 年度)。この共同研究においては、それぞれの国へのフィリピンからの移住史、第 1.5 世代の移住パターン、彼らの多様な適応のプロセスなどがある程度明らかとなった。しかし調査研究視点および調査資料を整理していくなかで、メンバーは、近年の移動する子どもの研究において強調される子どものエージェンシー、そして、先行研究において重視されてこなかった出身地社会における彼らの多様な生活経験の 2 点をより重視した形での、共同研究の継続・深化が必要であるとの認識を共有した。そこで、第 1.5 世代の社会生活の構築に焦点を当てた、新たな 3 年間の国際共同研究を組織することとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、異なる国(フランス、イタリア、日本、米国、オーストラリア、カナダ)に居住するフィリピン系移民第 1.5 世代を対象として、移住先と出身地の双方において、フィリピン地域研究を専門とする研究者による文化人類学的調査を実施すること、第二に、調査に基づき、異なる政治経済的条件下での彼らの移住経験および社会生活の構築プロセスを、その微細な差異に留意しつつ明らかにすること、第三に、調査結果の公表を通じて、移住研究および移動する子どもの人類的研究に対して実証的理論的貢献を果たすとともに、移動する子どもに関わる実践者や政策担当者に対して対象者の複雑かつ多様な移住経験を提示していくこと、であった。

3. 研究の方法

代表者・分担者・国外および国内研究協力者が、フィリピン系第 1.5 世代移住者の移住先であるアメリカ、カナダ、イギリス、フランス、イタリア、日本、オーストラリア、そして彼らがルーツを有するフィリピンにおいて民族誌的調査をおこなった。

各地での調査に際しては、次のような基本的な問いを準備した。それぞれの移住先国に、フィリピン人(系)(第一世代、第 1.5 世代)がどのように移住したのか、第 1.5 世

代のフィリピンでの生活経験はいかなるものであったか、彼らは、移住プロセスにおいてどのように社会関係や自己意識を再構築してきたのか、そうした社会関係と自己意識の再構築過程は、彼らの出身地での生活経験、移住先の政治経済的、法的、社会的条件とどのように関係しているのか。

こうした一般的な問いのほかには、共通の詳細な質問事項を設けることはせず、彼ら自身が語る移住経験を聴き取ることに集中し、移住プロセス、およびそこで生じる諸課題をできるかぎり当事者の視点から把握するように努めた。さらに、同じ国にルーツを持ち、異なる移住先へと移住した第 1.5 世代を相互に比較することで、個別事例の考察の深化と、移住経験に関する理論的洞察を得ることを目指した。

4. 研究成果

(1) フィリピンからの子どもの移住の概要

海外フィリピン人委員会(Commission of Filipino Overseas、以下 CFO)の統計では、1981 年から 2013 年のあいだに、年平均 12,727 人の 14 歳以下のフィリピン人が、年平均 6289 人の 15 歳から 19 歳のフィリピン人が「移民」として移動している。また、13 歳から 19 歳で、CFO に登録して 1988 年から 2012 年までの期間に移住資格を持ち出国した人数を見ると、全体では 22 万人以上となっている。移住先別にみると、旧宗主国であり、フィリピンからの移住者のストックが最大の米国が 14 万人以上を数え、第一位であり、以下、カナダ(約 4 万 4 千人)、日本(約 9 千人)、オーストラリア(約 8 千人)、イタリア(約 7 千人)と続く。近年は、カナダ、イタリア、日本の増加が目立っており、2008 年から 2012 年までの 5 年間の数字を見ると、米国約 2 万 6 千人、カナダ約 1 万 8 千人、イタリア約 4 千人、日本約 3 千人となっている。

(2) 第 1.5 世代の社会生活の構築

以下では、それぞれの調査地での研究成果を最終報告書の内容に即して紹介する。

フランスでは約 5 万人のフィリピン人が都市部の家事労働者などとして就労しており、その 8 割が居住資格を持たないと推定されている。聴き取りをおこなった第 1.5 世代のなかにも正規の居住資格を持たない者が含まれており、それら子供は、親が入国を手配する代理店に依頼して呼び寄せていた。

フランスで就労する親たちは、就労上の困難から、あるいは夫婦関係の不和から、子どもたちをフィリピンの親族のもとに残す、または送り返すことが多かった。それらフィリピンで暮らす子どもたちは、フランスからの送金収入によって経済的に恵まれた生活を送っていたが、彼らは、親が自分たちを残して働きにいったことに関して感情的困難を表明することもあった。ただし半数程度の対象者は、親との同居の記憶がほとんどなく、

むしろ同居する近親者との間により親密な関係性を構築している。それらの子供たちにとっては、親密な養育者との別れをもたらすフランス行きこそが感情的困難を生み出すものであった。

パリへ移住した彼らの多くは、住居の小ささなどに象徴される階層の下降階層移動の感覚や、家族再結合後の家族生活の困難を表明する。後者については、休日さえも働いて一緒にいない母親を「まるで独身女性のように」と批判的に語るなど、フィリピンでの社会生活のなかで形成され、パリに持ち込まれた「想像上の理想的母親像」と現実の母親の生き方とのギャップについての悩みを語る者もいた。また、母親の再婚によってステップ家族との同居が始まった第1.5世代は、「自分の居場所がない」などと家族生活のストレスについて語った。ただし、そうしたストレスは、近隣に親族がいる場合、その親族と部分的に同居したりすることで緩和されることもある。

彼らのほとんどは、学校に編入する際、新規移住者のためのフランス語クラスを受講する。彼らにとって言語習得は容易ではないが、授業後の補修や言語習得支援、奨学金などの制度的支援を得ながら、英語力を活かすなどして高等教育に進学する者もいる。

イタリアでは1980年代以降、大都市を中心に、家事労働者として就労するフィリピン人が増加した。第一世代の多くは、親族や友人の支援で移住し、イタリア政府の合法化措置を受けて居住許可を取得した。1990年代までは彼らは子どもをフィリピンに残し、あるいは戻すことが多かったが、2000年代以降は、住環境の向上などにより、イタリア政府の家族再結合プログラムによって子どもを呼び寄せる親が増加した。

子供たちのほとんどは、フィリピンで近親者に養育されていた。彼らはイタリアの両親からの送金により、私立中学に通い、都市的な消費スタイルを享受していた。裕福な生活を送り、近親者との親密な関係を構築していた彼らは、イタリアへの移動を、悲しい経験、ないしは両義的な経験として回想する。

彼らの多くは、イタリアでの家族生活、移民コミュニティ、学校生活への適応の困難を強調した。とりわけ、親と共住した記憶をもたない子どもたちにとって、親子関係は意識的かつ微妙な調整が必要となる関係であり、家族再結合に際しての感情的困難が頻繁に語られた。また、イタリアの学校における移民の子どもたちへの支援の薄さや、言語習得の困難、フィリピンとイタリアの学校システムや教室の雰囲気の違いは、彼らの多くを学校教育から遠ざける要因となっていた。

そうした困難に対して、彼らはSMSやSNSなどを駆使して、同じフィリピン出身の子どもたちとのネットワークを構築したり、イトコ同士の関係を再構築したりして、自分たちの社会空間を形成することで対応しようとして

していた。また、故郷の親族を支援したり、出身地に家屋を建設するなど、トランスナショナルなつながりを再構築し、フィリピンの出身社会に自らの位置を確保する者もいた。

これら二つの国と比較すると、日本のフィリピン系第1.5世代の移住経緯はより多様である。第一の類型としては、日本人男性と結婚した母親に呼び寄せられた、母親の連れ子が挙げられる。2000年代半ばまで、多くのフィリピン人女性が日本で「エンターテイナー」として働いていたことを背景として、多数のフィリピン人女性と日本人男性が結婚した。日本人男性と結婚したフィリピン人女性のなかには、フィリピンで子どもを産んでいた者が少なくなく、彼女たちは結婚後にそれら子どもたちを日本に呼び寄せるようになった。また、ケースとしてはより少なかったが、第二の類型として、戦前にフィリピンに移住した日系フィリピン人の家族移住において、子ども期にフィリピンから日本へ移住した人々がいる。さらに第三の類型として、日本人男性とフィリピン人女性との間の子どものうち、フィリピンで子ども期を過ごし、後に日本に移住した人々がいる。

対象者のフィリピンでの生活については、第一の類型の子どもたちの多くは日本で暮らす母親から送金を受けながら、近親者に養育されており、授業料のかかる私立学校に通う子どもたちもいた。第二の類型の子どもたちも、両親が日本で就労している間、送金を受けながら、近親者に養育されていた。しかし、第一の類型と第三の類型の子どもたちの一部には、安定的かつ十分な送金収入がないこと、あるいは移住者と養親の関係が悪化していたことから、フィリピンで経済的に困難な生活を送っていた者もいた。

日本での生活については、母親との離別を経験した者たちの多くは、その関係の再構築の難しさを表明する。また、母親が日本人男性と結婚/再婚している場合、ステップファーザーとの関係構築も必要となるが、ステップファーザーがどの程度彼らの教育に関与するかが、彼らの教育達成レベルに大きな影響を及ぼしていた。第三の類型の子どもたちは、親の離婚を契機にフィリピンに送られ、近親者に養育された者が多いが、カトリックの家族・ジェンダー規範の影響力が強いフィリピン社会において育った彼らは、ときに自らのそうした家族を「ブロークン・ファミリー」として否定的に語り、また理想的な女性像から逸脱した存在として母親を捉えることもある。そこでは、エスニックアイデンティティと結びついた社会規範・価値意識が、物質的困窮状況とあいまって彼らの感情的困難を強化している状況がみられた。

日本の学校への編入後は、学校で日本語習得の支援を受けるが、漢字文化圏出身生徒と比較すれば、日本語習得は容易ではなく、日本語力の欠如・不足は彼らの高校進学への障壁となっている。ただし、彼らのなかには、

フィリピンの教育のなかで培った英語力を活かし、高校、あるいは大学に進学したり、さらには日本で就職先を見つけた者もいる。また、そうした英語力を背景に、米国での進学や就職、フィリピンでの大学進学を模索する者もあり、実際に、フィリピンで高等教育を受けている例も見られた。他方で、彼らおよび母親の経済的資源および文化・社会関係資本が限られている場合、そのような地理的社会的移動の可能性はきわめて小さくなる。

旧宗主国であり、フィリピン人移住者の最大の受入国である米国への移住は、独立以前にも見られたが、1965年の米国移民法改正を契機に再び増加した。65年以降のフィリピン人の米国への移住の特徴として、ミドルクラスの移住が多いことが挙げられる。本研究も、西海岸に在住するミドルクラス出身の第1.5世代を対象とした。

調査対象者は、フィリピンでの生活を、家事労働者やたくさんの親族がいる、制約のない自由な生活としてノスタルジックに回想することが多い。同時に、米国への移住後の生活が自らを自立させてくれたとも語る。また、彼らは第二世代のフィリピン系に、英語力のなさを指摘されたり、FOB (Fresh Off the Boat) と呼ばれ侮辱されることがある。そうした状況において、彼らは、タガログ語ができない、家族を重視しない、年長者を尊敬しない、個人主義的である第二世代 = Fil-Am から自らを区別し、自分たちがその逆の特質をもつフィリピン生まれ Fil-born であることを強調する。彼らの親子関係は実際には常に調和的なものではないが、彼らは第二世代との相互行為のなかで、自分たちは家族との関係においてのみ存在しようという自己意識を構築してきており、彼らの特定の職種(看護師)への選好も、この家族とのつながりを不可欠な要素とする自己意識のなかで説明される。

オーストラリアへのフィリピンからの移住が増大したのは1970年代後半であった。その後、技術・専門職に就くミドルクラスの移住、結婚移住、家族再結合によってフィリピン人は増加した。本研究では都市部において、1970年代に移住した富裕層出身者、ミドルクラス出身者中心の1980年代に移住した人々、より広い階層出身で2000年代に移住した人々という三つのグループの移住経験が比較検討された。

第一のグループは、フィリピンでの裕福な暮らしからの下降階層移動の感覚を持ち、移住後のオーストラリアでの子供期若者期を、華やかなマニラとの対比で退屈な生活として回想する。ただし、彼らはフィリピンの名門私立学校で高い英語力を身に付けており、時に当時の南欧出身移民への差別感情が自分たちにも向けられていたと回想するが、学習や生活面の困難はほとんど語られない。第二のグループは、フィリピンでの教育経験によっては英語力が十分でない者もいたが、適応上の困難はそれほど強調されない。彼らの

友人は、同じフィリピン系に加え、当時増加していたアジア系東欧系などの新移民の子ども中心であった。第三のグループの中には、フィリピンの日常生活において英語を使用しない階層出身者も多く、英語の習得に苦労したという者もいる。それでも移住初期のいじめを除けば学校への適応の困難が表明されることは少ない。いずれのグループにも共通するのが、オーストラリア社会へのある程度の統合の感覚と、フィリピンでの拡大家族に囲まれた暮らしへのノスタルジーである。このことは彼らの自己意識が、常にフィリピンを参照点とする第一世代と、フィリピンにルーツを持ちながらもオーストラリア人であることを所与とみなす第二世代との中間に位置づけられることを示唆する。

カナダへのフィリピンからの移住は、1960年代の医療専門職従事者によって先鞭をつけられたが、その後も継続的に行われ、カナダは、現在、米国に次ぐ第二位のフィリピン人常住人口を擁する。本研究が目じたのは、24か月の住み込みケア労働の後に永住権申請が可能となる Live-In-Caregiver Program (LCP) でカナダに移住した女性と、彼女たちの、フィリピンに残され、後にカナダに移住した子供たちである。対象となった女性たちは、台湾で家事労働者として就労し、その後LCPでカナダに渡り、8年から10年程度の離別期間を経て子供と再結合した。

母親に残されてフィリピンで父親や親族と暮らしてきた子供たちは、ある話者のようにカナダへの移住の際、近しい友人や近親者との離別を悲しむと同時に、母親との再結合を楽しみにするなど入り混じった感情を抱く。しかしそうした感情は、カナダでの学校生活や家族生活に適応するにつれて、またフィリピンの友人とのSNSを通じての頻繁な接触を持つことで緩和され、徐々にカナダが居住の場所として意識されるようになるという。また、母親が過去の移住先(台湾)で構築した親友関係が、その子どもたち同士の親密な関係性を生み出し、生活上の困難を緩和する新たなネットワークとなっている状況もみられた。

移住後に彼らは、カナダでのパートタイム労働などの経験を通じて、フィリピンではなしえなかった、自らが稼ぎ手となり、親に依存しなくてもよい生活を実現したいと望むようになる。しかし、フィリピン政府の労働者送り出し政策とも合致するこうした彼らの移住労働者としての主体化は、母親が期待する移住者の子どもとしての就学継続への願いからは分岐することになる。

(3)まとめ

以上に簡単に紹介した個別の事例の記述分析を踏まえ、研究会等での議論をへて、メンバーは総合的な考察もおこなった。その考察内容の一部をごく手短かに紹介すれば、第1.5世代の移住プロセス、社会関係や自己意識の

様態に影響を及ぼす主要なコンテキストとして、フィリピンでの子供期の経験、移住先国の特徴、当該国へのフィリピン系の移住の歴史と特徴、家族移住の経路の特徴の4つを指摘し、それぞれの事例記述は、これら重なりあひながら彼らの生活に制約をもたらす4つのコンテキストのなかで、彼らがいかに自らの社会空間を構築し、アイデンティティを再構築してきたかを示すものであると論じた。

なお、これらの研究成果は、アメリカ人類学会、日本社会学会、フィリピン研究国際学会日本地区大会、その他、子どもの移動に関する2つの国際会議でパネルを組織して、その一部を公表した(学会発表参照)。また、メンバー全員が執筆した英文共著(全11章)が、代表者の長坂と研究協力者 Fresnoza-Flot の編集で、2015年中に Palgrave Macmillan より出版される予定である(図書)を参照)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. Fresnoza-Flot, A., "The bumpy landscape of family reunification: experiences of first and 1.5-generation Filipinos in France". *Journal of Ethnic and Migration Studies*. Advance online publication. 査読有, <http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/1369183X.2014.956711#.VBtqXBbJD9I>
2. 高畑幸・原めぐみ, 「在日フィリピン人の1.5世代: 日本は定住地か、それとも通過点か」『国際関係・比較文化研究』13(1):133-148, 査読無, 2014
3. 小ヶ谷千穂, 「支援組織との関わりから見るJFCのアイデンティティと複層的な日本経験」: 「JFC研究」のための試論」『国際交流学部紀要』15, 査読無, 2013, pp.189-213
4. 関恒樹, 「越境する子どものアイデンティティと「家族」の表象: アメリカ合衆国におけるフィリピン系1.5世代移民の事例から」『文化人類学』78(3):367-398, 査読有, 2013
5. Takahata, S. "The 1.5-Generation Filipinos in Japan: Youths Straddling between Education and Employment" 『国際関係・比較文化研究』11(1):291-302, 査読無, 2012

[学会発表](計24件)

1. 長坂格 「分離された社会空間に移動する: イタリア在住フィリピン系第1.5世代の移住経験」第87回日本社会学会, 2014年11月22日, 神戸大学
2. 原めぐみ 「創造・想像されるトランスナショナル家族: 日本とフィリピンを往来する若者移民を事例として」第87回日本社会学会, 2014年11月22日, 神戸大学

3. Fresnoza-Flot, A. and I. Nagasaka, Understanding mobile childhoods: Children of migrations from the Philippines to Europe. XVIII ISA World Congress of Sociology, 13-19 July 2014, パシフィコ横浜
4. Nagasaka, I. "Experience of (im)mobilities: Lived transnationalism among Filipino 1.5 generations in Italy." Philippine Studies Conference of Japan 2014, 1 March 2014, Kyoto University
5. Takahata, S. "The 1.5 generation Filipinos in Japan: Japan as the land of settlement or the stepping stone." Philippine Studies Conference of Japan 2014, 1 March 2014, Kyoto University
6. Fresnoza-Flot, A. "Migration, familial challenges and scholastic success: The case of 1.5-generation Filipinos in France." Philippine Studies Conference of Japan 2014, 1 March 2014, Kyoto University
7. Suzuki, N. "Reorienting the Virgin's home: Gender, family, and Filipino" Philippine Studies Conference of Japan 2014, 1 March 2014, Kyoto University
8. Hara, M. "Shuttling between two countries, searching for a family: Experience of transnational Japanese Filipinos." Philippine Studies Conference of Japan 2014, 1 March 2014, Kyoto University
9. Nagasaka, I. "Growing up in the transnational social field: Experiences of family separation and reunification of Filipino migrant children in Italy." 112th American Anthropological Association Annual Meeting, 20 November 2013, Chicago Hilton, USA.
10. Suzuki, N. "Disowned by Culture: Young Filipino Immigrants and the Violence of Family Values." 112th American Anthropological Association Annual Meeting, 20 November 2013, Chicago Hilton, USA.
11. Ogaya, C. "Family reunification for whom?: Case of Filipino youth and transmigrant mother in Toronto." 112th American Anthropological Association Annual Meeting, 20 November 2013, Chicago Hilton, USA.
12. Fresnoza-Flot, A. Pruning one's transnational roots: Family reunification experiences of children of Filipino immigrants in France." 112th American Anthropological Association Annual Meeting, 20 November 2013, Chicago Hilton, USA.
13. Nagasaka, I. "(Re)making parent-child relations: Experiences of 'family reunification' of Filipino children in Italy." International Conference on Children Migrants and Third Culture Kids: Roots and Routes, June 8 2013, Jagiellonian University, Poland.
14. Ogaya, C. "Dislocating dreams of family reunification: The case of transmigrant mothers and children in Toronto" International

- Conference on Children Migrants and Third Culture Kids: Roots and Routes, June 8 2013, Jagiellonian University, Poland.
15. Suzuki, N. "Living on the Margins of Transnationalism: Japanese Filipino Child Immigrants in Japan." International Conference on Children Migrants and Third Culture Kids: Roots and Routes, June 8 2013, Jagiellonian University, Poland.
 16. Fresnoza-Flot, A. "Circulation of children within the kinship group: Family ties experience of young Filipino immigrants in France." International Conference on Children Migrants and Third Culture Kids: Roots and Routes, June 8 2013, Jagiellonian University, Poland
 17. Sobritchea, C. and I. Nagasaka "Changes in Focus: A Review of Literature on the Filipino Family" 比較家族史学会第54回研究大会, 2012年6月17日, 京都大学
 18. Suzuki, N. "Don't Give a Damn': Filipino Youth and Unsuited Family Reunion in Japan" The 2012 Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 26-30 November 2012, Kalinga Institute of Industrial Technology, Bhubaneswar, India
 19. Fresnoza-Flot, A. "Growing up global between two societies: Filipino "1.5ers" in France and their caring grandmothers in the Philippines" The 2012 Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 26-30 November 2012, Kalinga Institute of Industrial Technology, Bhubaneswar, India
 20. Nagasaka, I. "Filipino Children on the Move: A Comparative Study on the 1.5-Generation's Migratory Experiences" 3rd International conference of geographies of children, young people and families, 11-13 July 2012, National University of Singapore
 21. Ogaya, C. "Mother's Dream and Children's Realities: 1.5 Generation and their transmigrant mothers in Toronto." 3rd International conference of geographies of children, young people and families, 11-13 July 2012, National University of Singapore
 22. Seki, K. "Difference, Identity, and Subjectivity in Transnational Social Field: A Case of Filipino 1.5 Generation Children in the United States" 3rd International conference of geographies of children, young people and families, 11-13 July 2012, National University of Singapore
 23. Pertierra, R. "Children on the move: 1.5 generation Filipinos in Australia across the generations" 3rd International conference of geographies of children, young people and families, 11-13 July 2012, National University

of Singapore

24. Fresnoza-Flot, R. "Selected ties and reinforced transnational intimacies: family building among 1.5-generation Filipinos in France" 3rd International conference of geographies of children, young people and families, 11-13 July 2012, National University of Singapore

〔図書〕(計2件)

1. Nagasaka, I. "Growing up in a transnational family: Experiences of family separation and reunification of Filipino migrants' children in Italy" In K. Um and S. Gaspar (eds.) Southeast Asian Migration: People on the move in search of work, marriage and refuge. Sussex Academic Press, 2015(刊行予定)
2. Nagasaka, I. and A. Fresnoza-Flot (eds.) Mobile childhoods in Filipino transnational families: Migrant children in with similar roots and different routes. Palgrave Macmillan, 2015 (刊行予定)

6. 研究組織

(1)研究代表者

長坂 格 (NAGASAKA ITARU)
 広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
 研究者番号: 60314449

(2)研究分担者

小ヶ谷 千穂 (OGAYA CHIHOU)
 横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授
 研究者番号: 00401688

鈴木 伸枝 (SUZUKINOBU E)

千葉大学・文学部・教授
 研究者番号: 70412731

関 恒樹 (SEKIKOKI)

広島大学・大学院国際協力研究科・准教授
 研究者番号: 30346530

高畑 幸 (TAKAHATA SACHI)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授
 研究者番号: 50382007

(3)研究協力者(海外・国内)

RAUL PERTIERRA
 A teneo de M anila U niversity

A SUN C ION FRESN O ZA -FLO T
 Catholic U niversity of Louvain

原めぐみ (HARA MEGUMI)

大阪大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程